

【ねがいましては】

平成19年5月28日

KYOWA SCHOOL

第199号

「知らぬ間」

ある日の中学生たちの授業、授業といっても名ばかりで、それぞれがそれぞれのところを、それぞれ学習していくというものの、説明もよほどのことがない限り個別に行なっているわけで……。その日も何がきっかけでそのような話になったのか、記憶力低下は年功序列のルールに従って徐々に進行中のようにです。

「さて、みなさん。俺は心のことにはとてもうるさいよね。なかなか勉強がはかどらなくても、精一杯に向かっていけば100点だし、どんなにすいすいとこなしても、それがいい加減な気持ちであったり、人を傷つけながら取り組んでいたとしたら、ひどくしかるよね……………」ちょっと間をおいて……………。

「で、『学校病』と時々話したりするけれど、君たち全員がかかってしまっている『学校病』があります。なんだからわかる？」…………しばらく沈黙……………。

「あのね、テストあるでしょ！ そのテストを返してもらうときに、必ずといっていいほど思ってしまった心があるんだ。…………何かというと『あの子は、あいつは、私より点が悪くありますように…………私の方がどうか点が上でありますように…………』というやつ…………。実はこの私もそう思っていました。」

これをお読みのお父さま、そしてお母さまも同様に、小学生時代そして中学高校時代、同じような気持ちを持ったことがあるはずです。これ実は他人の不幸を願っているわけで、どう考えても良い心ではないのです。知らずのうちに当然のように入り込んでいく心なのです。

相手の不幸を喜んでしまう心。その他にはどのようなところで使っているのでしょうか。例えばプロ野球中継で、相手の野手がエラーなど使用ものなら「よーしよーしよー！ いいぞ！」などと喜んでみたり、運動会などでも、リレーなどで自分以外のチームの子が転ぶなどしたら、もうたちまち「イエーイ！」などと喜んでしまうはず。

どうにもこうにも人類、歴史的に眺めてみても『争う生物』のようで、映画やテレビでもヒットするとしたら勝負物が多いのです。『愛』をテーマにした物でも主人公が愛獲得のために、かなうことのない強い相手に悠然と立ち向かってみたり、勝ち負けがそのストーリーの中になくても、危険を冒してまでも愛する人のために考えられない行動をとってみたり、感動は普通では考えられない内容のものから生まれ出てきます。

先ほどの相手の不幸を願うこと…………。これ思っているだけなら人を傷つけるわけでもなく、迷惑をかけるわけでもありません。しかし、じゃー思っているよと奨励できることでもありません。やはり初めの一步から、悪い事は悪いと訴えていかなければならないと思うのです。少なくともそう思う必要のない環境整備が必要かなとも思います。

まず『テストのない空間』このテストという方法は、一種の競争原理を子どもたちに働かせ、指導者が苦勞することなく成績アップにつながる最も良い方法なのです。そろばんもそうですが、ゲーム感覚でむちゃくちゃ精一杯になります。勝ったものにはそれはうれしい気持ちがいっぱいです。いつも目立つのは『勝者』…………。敗者の気持ちは取り上げられないのが常です。負けたくなかったら、もっと練習してもっと勉強して勝ったらいいではないか…………。というのが世間の声でしょう。そこに『がんばる』というなんとも聞こえの良い言葉がやってきます。

そこに大きな『人らしくない行動』が隠れています。

なぜ勝った者は負けたものに『教える』という行為が出来ないのでしょう。『ありがとう』という感謝の念を持たないのでしょう。助け合うことは人として最も人らしい『善』なはずですが、今の学校の中では、勉強を教えあう光景が少ないと思います。そう想像しています。外れてはいないはずです。特に中学校では定期テストの度に『順位』が出ますし、下手に勉強を教えようものなら次回定期テストで順位が下がってしまうかもしれません。

5月5日付の読売新聞1面に興味深い記事がありました。ある大学教授が手がけてきた日本人の利他心（他人の幸福を願う心）に関する調査のひとつ、小学生にゲームをさせ、勝った子が、もらったチップをどう使うで思いやりの度合いを測るというもの。1980年代半ばまで、余ったチップを負けた子に分け与える子の割合は約80%以上に上ったが、80年代後半に突如40%台に下がってしまったそうです。

私はこの記事を読みながら心に大粒の冷や汗が流れるのを感じました。このままではいけない…………。

80年代後半、小学生であった人たちは、現在20代後半から30代前半、ひょっとすると小学生の母であったり父であったり…………。先ほどの記事の最後の方に、ある地下鉄での光景がありました。

作家のマークス寿子さん（71）は、3年前に東京の地下鉄で体験した出来事が忘れられない。足が悪かったマークスさんに席を譲ろうと、前に座っていた男児が腰を浮かした。すると隣の父親がびしやりと言った。「お前も疲れているんだから余計なことはしないでいい。」

ここに通う子どもたちよ、精一杯に生きようね。隣の人が喜んでくれる、隣の人が「君に会えてよかった」って言ってくれる、そんな心でいようね！

隣の人がにこっと笑ってくれること、本当にうれしく感じるよ！ なぜなら私の隣で笑ってくれたでしょ！